

江口

禪竹作

季は	地は	ツレ	シテ	ワキ	後	シテ	ワキ	前
秋	摂津	遊女	江口の君	前に同じ		里女	旅僧	

「月は昔の友ならば。く。世の外いづくならまし。

「是は諸国一見の僧にて候。我いまだ津の国天王寺に参らず候ふ程に。此度思ひ立ち天王寺に参らばやと思ひ候。

「都をば。まだ夜深きに旅立ちて。く。淀の川舟行末は。鵜殿の蘆のほの見えし。松の煙の浪まする。江口の里に着きにけり。く。

「さては是なるは江口の君の旧跡かや。痛はしや其

身は土中に埋むといへども。名はとゞまりて今までも。昔語りの旧跡を。今見る事のあはれさよ。

詞「實にや西行法師此所にて。一夜の宿を借りけるに。

主の心なかりしかば。世の中を厭ふまでこそ難からめ。仮の宿りを惜む君かなと詠じけんも。此所にての事なるべし。あら痛はしや候。

シテ詞「なふくあれなる御僧。今の歌をば何と思ひよりて口づさび給ひ候ふぞ。

「不思議やな人家も見えぬ方よりも。女性一人来りつゝ。今の詠歌の口ずさびを。如何にと問はせ給ふ事。そもそも何故に尋ね給ふぞ。

シテ
「忘れて年を経し物を。又思ひ染む言の葉の。草の陰野の露の世を。厭ふまでこそ難からぬ。仮の宿りを惜しむとの。其言の葉も恥かしければ。さのみは惜しみ参らせざりし。其理をも申さん為に。是まで顕はれ出でたるなり。

ワキ
「心得ず仮の宿りを惜しむ君かなと。西行法師が詠ぜし跡を。唯何となく弔ふ所に。さのみは惜しまざりにしと。ことわり給ふ御身はさて。如何なる人にてましますぞ。

シテ
「いやさればこそ惜しまぬよしの御返事を。申しあ歌をば何とてか。詠じもせさせ給はざるらん。

ワキ
「実に其返歌の言の葉は世を厭ふ。

シテ
「人とし聞けば仮の宿に。

詞

「心留むなと思ふばかりぞ。心とむなと捨人を。諫

め申せば女の宿りに。とめ参らせぬも理ならずや。

ワキ 「實に理なり西行も。仮の宿りを捨人といひ。

シテ 「此方も名におふ色好の。家にはさしも埋木の。人

しれぬ事のみ多き宿に。

ワキ 「心とむなと詠じ給ふは。

シテ 「捨人を思ふ心なるを。

ワキ 「唯惜しむとの。

シテ 「言の葉は。

地 「惜しむこそ。惜しまぬ仮の宿なるを。く。など
や惜しむと夕波の。かへらぬ古は今とても。捨人
の世語りに。心な留め給ひそ。

ロング地 「實にや浮世の物語り。聞けば姿も黄昏に。かげろ
ふ人は如何ならん。

シテ 「黄昏に。たゞむ影はほのぐと。見えがくれな
る河隈に。江口の流れの。君とや見えん恥かしや。

地「さては疑ひ荒磯の。波と消えにし跡なれや。

シテ「仮に住み來し我宿の。

地「梅の立枝や見えつらん。

シテ「思ひの外に。

地「君が来ませるや。一樹の陰にや宿りけん。又は一河の流れの水。汲みても知し召されよや。江口の君の幽靈ぞと。声ばかりして失せにけり。」（中入）

ワキ詞「さては江口の君の幽靈仮に顕はれ。我に言葉をか

はしけるぞや。いざ弔ひて浮べんと。

歌「言ひもあへねば不思議やな。」く。月澄み渡る河水に。遊女のうたふ舟遊び。月に見えたる不思議さよ。」く。

地「河船を。とめて逢瀬の波枕。」く。浮世の夢を見習はしの。驚かぬ身のはかなさよ。佐用姫が松浦渴。かたしく袖の涙の。唐舟の名残なり。また宇治の橋姫も。訪はんともせぬ人を待つも。身の

上とあはれなり。よしや吉野の。花も雪も雲も波
も。あはれ世にあはゞや。

ワキ 「ふしぎやな月澄み渡る水の面に。遊女のあまたう
たふ謡。色めきあへる人影は。そも誰人の舟やら
ん。

シテ 「何此舟を誰が船とは。恥かしながら古の。江口の
君の川逍遙の。月の夜舟を御覧ぜよ。

ワキ 「そもそも江口の遊女とは。それは去りにし古の。

シテ詞 「いや古とは。御覧ぜよ月は昔にかはらめや。

ツレ 「我等もかやうに見え来るを。いにしへ人とは現な
や。

シテ 「よしく何かと宣ふとも。

ツレ 「いはじや聞かじ。

シテ 「むつかしや。

二人 「秋の水。漲り落ちて去る船の。

シテ 「月も影さす棹の歌。

地 「歌へや歌へうたかたの。あはれ昔の恋しさを。今
も遊女の船遊び。世を渡る一節を。歌ひていざや
遊ばん。

地クリ 「夫れ十二因縁の流転は車の庭に廻るが如し。

シテ 「鳥の林に遊ぶに似たり。

地 「前生又前生。

シテ 「曾て生々の前を知らず。

地 「来世なほ来世。更に世々の終りをわきまふる事な

し。

シテサシ 「或は人中天上の善果を受くといへども。

地 「顛倒迷妄して未だ解脱の種を植ゑず。

シテ 「或は三途八難の悪趣に墮して。

地 患にさへられて。既に発心のなかだちを失ふ。

シテ 「然るに我等たまたま受けがたき人身を受けたりといへども。

地 「罪業深き身と生れ。殊にためし少なき河竹の。流

れの女となる。前の世の報いまで。思ひやることそ
悲しけれ。

クセ
「紅花の春の朝。紅錦繡の山。粧ひをなすと見えし

も。夕の風に誘はれ。紅葉の秋の夕。黄纈纈の林。

色を含むといへども。朝の霜にうつろふ。松風羅

月に言葉をかはす賓客も。去つて来る事なし。翠

帳紅闌に。枕をならべし妹背も。いつの間にかは

隔つらん。凡そ心なき草木。情ある人倫。いづれ

あはれを遁るべき。かくは思ひ知りながら。

シテ
「ある時は色に染み。貪着の思ひ浅からず。

地
「又ある時は声を聞き。愛執の心いと深き。心に思

ひ口に言ふ。妄舌の縁となる物を。實にや皆人は。
六塵の境に迷ひ。六根の罪を作る事も。見る事聞く事に。迷ふ心なるべし。

地
「おもしろや。(序の舞)

シテ
「実相無漏の大海に。五塵六欲の風は吹かねども。

地「隨縁真如の波の。立たぬ日もなし。」。

シテ「波の立居も何故ぞ。仮なる宿に心とむる故。

地「心とめずは浮世もあらじ。」。

シテ「人をも慕はじ。」。

地「待つ暮もなく。」。

シテ「別路も嵐吹く。」。

地「花よ紅葉よ月雪の古言も。あらよしなや。」。

シテ「思へば仮の宿。」。

地「思へば仮の宿に。心とむなと人をだに。諫めし我なり。是までなりや帰るとて。すなはち普賢菩薩と顕はれ。船は白象となりつゝ。光とゝもに白妙の。白雲に打ち乗りて。西の空に行き給ふ。有難くぞ覺ゆる。有難くこそは覺ゆれ。」。